

第38回

第6章 現代の諸課題と倫理

生命と倫理

今回学ぶこと

さまざまな技術の革新によって、私たちは以前にはなかった新しい問題に直面しています。バイオテクノロジーなどの進歩に伴って起こる問題や、生殖医療が引き起こす新しい家族の問題、医療現場におけるインフォームド・コンセントのありかたや、生命の質（QOL）などについて学びます。



講師

千田有紀

■ 生命科学の発展と生命倫理 ■

1996年に世界で初めてのクローン羊の「ドリー」が誕生してから、バイオテクノロジーの進歩は著しいものがあります。

細胞に数種類の遺伝子を導入して、培養することで、さまざまな細胞や組織、臓器に分化する能力を持つ“細胞のもと”になるiPS細胞が開発されました。また、ヒトの遺伝子情報を解読しようとするヒトゲノム解析も進みました。ゲノムというのは、遺伝子と染色体を合わせた造語で、ある生物が生物たらしめている、必要な一そろいの遺伝子情報のことをいいます。近年は、ゲノム編集などの技術も進化しています。このようなバイオテクノロジーや先端的な医療技術における人間の行為の倫理的、法的、社会的な問題やその体系的な研究を、生命倫理学（バイオエシックス）といいます。

■ 生殖技術と家族 ■

1978年には、卵子と精子を体外で受精させて、子宮に戻して子どもを誕生させるという体外受精が成功しました。その後、精子を直接卵子に入れて受精させる顕微授精などの技術、卵子や精子や受精卵を冷凍で保存する技術などのさまざまな技術が進んでいます。2019年には、新生児の14人に1人は、体外受精で生まれているそうです。

このような技術が進む一方で、遺伝上の父母、育ての父母、代理出産をした母親と、たくさんの親が生まれるということが起こっています。子どもが欲しいという願いをかなえる人がいる一方で、こうした生殖技術を商品化することによって、生殖医療ビジネ

スは、経済格差を利用しているなどの問題を生み出していることもあります。

■ ■ 生命の質と生命の尊厳 ■ ■

医療技術の進展により、どのように生きるのかという問いが、いままで以上に重要になっています。治癒困難な病気を前にして、残された時間の生き方を大切にする生命の質（QOL）という考え方が重要になっています。しかしこれは人間の生命は神聖で絶対的なものであるという生命の尊厳（SOL）の考え方と対立する側面があります。

また医者と患者の関係においては、医者が保護者のように患者を保護・干渉するパートナーリズムの問題を考えなければなりませんし、患者が十分な説明を受けたうえで、納得して治療方針や方法に同意するインフォームド・コンセントのありかたなども問題になっています。

中世には「メメント・モリ（死を記憶せよ）」という考え方がありました。病とともに生きるという「一病息災」という考え方も見直すことも可能かもしれません。

